

教師について

H 臨床文藝医学会副理事長、内科医

教師は必ず現れる。小林秀雄は、昭和36(1961)年 8月の講演・学生との対話の中で、このように説いた。教師とは一体何だろうか。どうして必ず現れるのだろうか。

講演で小林は教師を、各学問分野の祖たる人物としている。今、私は拡大解釈を行い「気づきと、気づきを与えうるもの」を教師であると捉えてみたい。すると我々は日々教師に出会っている。特定の学問分野・人物に留まらず、例えば天候、体温、視線、仕草、汚い言葉、舌の浮腫み、長引く肩の痛みなど、擬人的に万事が手を差し伸べている。「すべてのことはメッセージ(荒井由実、1974年)」の心持ちだ。

現前し、私の意識・記憶を構成し続ける存在。見ても見えなかったことが、ある時を切欠として認識される素晴らしさ。その切欠や過程こそ教師と言えまいか。隠れた状態から、時が満ちて人が出逢う。強い喜びとともに、今この時にむけて備えられたように感得される。昔からそこに在ったにも関わらず、だ。それこそ現れるという言葉がふさわしい。

教師は現れうる、とでもした方が誤りの少ない記述には近づくだろう。しかし、必ず現れると小林は言う。これは臨床と

おもう。無知・未知の不安に覆われる者に差し伸べられる手。絶対は、科学の世界では存在し得ないはずだ。だが人は人に語りかける時、必ずとっていいほど必ずと言っている。

人は必ず気づく。教師は必ず現れるのである。(H)